

逆転での初優勝！

得意のプレーオフを制す

通算 13 アンダー 197

秋吉 翔太（ホームテック）



【写真はプレーオフを制した秋吉Ⓔと2位の池村寛Ⓕ】

的確な判断だった。プレーオフ1ホール目は通常ロングを今大会仕様でミドルにした長い494ヤード。秋吉と池村寛ともに第1打は右ラフだったが、秋吉の位置は「前も空いていたし、難しい状況ではなかった」と池村寛よりも有利ではあった。先にセカンドを打った池村寛はグリーン手前のバンカーにつかまる。秋吉は「グリーン手前でいい」と残り170ヤードを9Iで狙い通りのポジションに落とす。ピンまで約10ヤード。パーを拾える確率が高かった。このショットが相手にプレッシャーをかけたのだろう。池村寛の第3打はバンカーから「ホームラン」し、第4打も寄らない。秋吉が第3打をOKにつけ、勝負はついた。

最終日は首位から2打差のスタート。同じ組で回る池村寛が2番でバーディーを奪って3打差。これを6番からの3連続バーディーで追いつき、11、12番の連続バーディーで13番まで逆に2打差をつけた。ところが、14番でボギー。「優勝し始めて力みもあった」と本人も認めるように最後の6ホールは伸ばせない。この間、池村寛の18番でのバーディーで並ばれてしまう。

ただ、プレーオフが決まると、気持ち切り替わる。「プレーオフはジュニアの頃から相性がいいし、嫌な感じはなかった。普段通りにやれた」。これまでのプレーオフでの通算成績は3勝1敗。今大会も負けることなく、4勝1敗となった。

熊本市出身の30歳。鹿児島・樟南高時代の2008年の大分国体少年個人の部で現在は米国ツアーで活躍する松山英樹らを抑えて優勝。秋吉にとり、大分は方向がいいのかもしれない。その後、プロに転向し、17年に初シード権を獲得すると、翌18年にはミズノオープンなどツアー2勝。今回の優勝はこの年以来となる。

今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で試合数がめっきり減った。「目標がないので、練習をしても身に入らなかった」という時間を過ごしてきたが、今月3～6日にはフジサンケイ・クラシックがあり、そのトーナメント



【写真は優勝を手中にしたプレーオフでの秋吉のアプローチ】

では3日目に67をマークして27位に入った。そして、今大会制覇。次の試合は10月15日からの日本オープン（千葉・紫CCすみれコース）の予定。

「残りの試合で優勝争いをしたい」と九州を代表するプレーヤーの1人と認められる秋吉が、九州オープン優勝をきっかけに秋のツアーを盛り上げる。



【写真は協賛えんホールディングスからの500万円のパネルを手に笑顔の秋吉⑤】

◆プレーオフで敗れた池村寛「プレーオフでのティーショットは直ドラだったんですが、ちょっと右にふかしました。（優勝争いをした）5年前は自滅したので今回は自滅したくなかった。自滅しなかったのも、ちょっとは成長したかな、と思います。（プレーオフに持ち込んだ）18番のセカンドは残り70ヤードを58度（のウエッジ）で狙い通りのショットが打てた。（フジサンケイ・クラシックから）この9日間は毎日ゴルフをして、3大会ともいずれもトップ10入りしたので上出来です」

初のベストアマ

通算2アンダー208

東海大九州4年の中村志凪(宮崎国際)



【写真は初のベストアマに輝いた中村(右)】

大まくりのベストアマだ。初日は75をたたいて96位タイと大きく出遅れた。ラウンド後、東海大九州の堀田廣樹監督に相談して、問題点をチェック。2日目には5アンダー65をマークして、一気に31位タイまで浮上した。そして最終日は6バーディー、2ボギー、1ダブルボギーの68、通算2アンダー208となり、3度目の出場で初のタイトルに届いた。2アンダーは3日間での自己ベストでもある。「パットもショットも良くて、スコアが出るかな、と思っていました。2、3日目は思い通りのゴルフができた」と中村が納得のラウンドを振

り返った。

名前は志風と書いて「しなぎ」と読む。「ちゃんと読めないこともあるけど、珍しいので特別感がありますね。母がつけました」と言う。同校ゴルフ部の副将を務め、昨年の九州学生チャンピオン。今後はプロを目指し、テストにチャレンジする。「大学4年間の集大成で勝てたし、プロと一緒にラウンドして『こういうゴルフをしないとツアーでは勝てない』というのを学びました」。中村にとってステップアップの大会となった。



【写真は大会が開催された大分東急GC】